SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中学校社会科における国際協力のあり方を構想する力の育成の考察：地理的分野の単元「アフリカ州―人々が幸せになれるアフリカビジネスを企画しよう―」の実践の分析を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 弘力 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027944

中学校社会科における国際協力のあり方を構想する力の育成の考察

―地理的分野の単元「アフリカ州―人々が幸せになれるアフリカビジネスを企画しよう―」の実践の分析を通じて―

A Study of Improving Students' Ability to Conceive the Modalities of International Cooperation in Junior High School Social Studies

小林弘力（静岡大学教育学部附属島田中学校）

これまで静岡大学教育学部附属島田中学校では、主体的に社会に参加する生徒を育てるための授業を目指し、社会を考察する力・未来を構想する力と、主体性を高める授業過程とを関連づけながら実践を重ねた。自己の意思決定に基づき主体的に社会の創造に参加し、未来の主権者としての意識を高めるために、社会を知る学習にとどまることなく、また、社会への参加を現在に限定することなく、未来の自己の課題として捉えることができる単元開発に取り組んできた。そうした積み重ねを踏まえながら、これからの国際協力のあり方を構想する力の育成を目指す授業を実践し、考察したい。

１．単元について

今回の授業実践は、１年生地理「世界の諸地域」より「アフリカ州の国々」の単元を題材に扱った。

現代の社会において、最も多様で大きな問題を抱えるアフリカ州の課題は、国際社会に与えられた課題でもある。しかしアフリカ州を扱う実際の授業では、それらの課題を学習しながらも「“でも” 自分たちには何もできない」「“でも” アフリカ州はそういう地域なんだ」というように、「アフリカ州の人々は、かわいそうではあるけど遠い国の話」で終わってしまうことが少なくない。主体的に社会の創造に参加する意欲を高める上で、アフリカ州が抱える課題と向き合い、多面的・多角的な考察を通して、このような壁を乗り越えて自分なりに構想していくことは、とても重要なものであると考える。

また、近年アフリカ州の実情は大きく変革している。2000年以降、アフリカ州の多くの国々で選挙が実施されるなど、民主化が進んでいる。また、スーダンでの内戦の終結など、アフリカ州での紛争の数自体は減少しており、大部分の国では平和の定着と復興の兆しを見せている。さらに、アフリカ州諸国の貿易額や経済成長率に関する種々の統計に見られるように、アフリカ州の経済発展は著しい。しかし日本は、アフリカ州との経済的な結びつきの面では世界から立ち遅れている。また一方で、未だに強固な独裁体制が敷かれている国があることも、ますます内戦や紛争が深刻化している地域があることも事実である。このような二面性は、アフリカ州が抱える新たな課題であろう。

このように姿を変えているアフリカ州を念頭に置いたとき、生徒たちが社会に出て活躍する10年後や20年後に向けて必要なことは何だろうか。「アフリカ州の国々は経済的に貧しく、紛争が多発し、産業が停滞していて、ほとんどの人々が飢餓にさらされているため、先進国の政府や民間団体が支援や援助をしてあげなければならない」という上からの見方は、アフリカ州の実情と乖離してしまっているように思う。生徒に必要なことは、多様な課題を抱えながらも急速に経済発展するアフリカ州との、新たな関わり方について構想することではないかと考える。

以上から、本単元では、課題と向き合い、教材と主体的に関わっていこうとする生徒の姿、ともに繁栄を目指す国際社会の対等な仲間として、または、互いに利益を生み出すビジネスパートナーとして、アフリカ州とどのように関わっていくことが望ましいのかを構想する生徒の姿を目指した。

２．手立てについて

社会を考察し、構想する力を育み、主体性を高めるために、次のような手立てをとった。

（1）パフォーマンス課題

より具体的な場面設定や単元を貫く課題設定を行い、単元で得た知識や技能を活用して課題の解決を図る活動を行うために、次のようなパフォーマンス課題を設定した。

> あなたは、ある日本企業の経営企画部長です。今回、様々な課題を抱えながらも経済発展の兆しが見えているアフリカ州を舞台に、新たな事業を展開することとなりました。ＳＤＧｓに取り組む企業として、人々を幸せにすることができる事業を企画し、経営企画会議で提案してください。

このパフォーマンス課題を設定するうえで、利益を目的とせず支援や援助をするといった慈善事業のような関係ではなく、互いに利益を生み出せるビジネスパートナーのような関係を構想することを重視した。互いに利益がなければパートナーシップを継続するのは難しいため、考察の過程でアフリカ州の強みにも目を向けるよう意識させるためである。また、企業の利益ばかりに偏重せず、労働問題や環境問題なども考慮しながら多面的に考察できるよう、ＳＤＧｓの視点も取り入れた。

（2）ポートフォリオ評価

単元の中でどのような学びを蓄積したか、自らの考えにどのような変容があったか、学びの足跡を客観的に振り返るためにポートフォリオによる評価を実施した。また、単元の見通しを立てるとともに、授業での学びがパフォーマンス課題にどのように結びついていくかの見取り図としても機能することを期待した。

（3）単元の三段階構成

特に身につけさせたい資質・能力に応じて、単元を三段階の学習プロセスに分類し、第一次、第二次、第三次とした。（表１）即ち、第一次を問題把握のプロセス、第二次を問題分析と意思決定のプロセス、第三次を提案・参加のプロセスである。附属島田中学校社会科の教科テーマである主体的に社会に参加する生徒の育成を目指すうえで、特に第三次が重

表１　単元の三段階構成

次	時	授業名・目標
第一次	第１時	〈アフリカ州は苦悩している？躍動している？〉 アフリカ州の国々に関する統計資料や写真資料などを読み取ることで、アフリカ州の現状について関心を高め、主体的に課題を解決しようとしている。 （主体的に学習に取り組む態度）
第二次	第２時	〈大西洋の三角貿易は、アフリカ州にどのような影響を与えたのだろうか〉 周辺の地域との歴史的な関わりから、貿易相手国を「原料の供給地」「製品の市場」とみなす貿易は、両国の発展にとって好ましくないということを理解することができる。 （知識・技能）
	第３時	〈アフリカ州の豊富な資源をどのように生かすべきなのだろうか〉 産業の依存・資源の争奪・外国資本への流出など、アフリカ州の資源に関する諸問題について多面的に考察することができる。（思考・判断・表現）
	第４時	〈貧困の環にある発展の芽を見つけよう〉 前時までに学習してきたことをまとめる活動を通して、アフリカ州の様々な課題と持ち味を相互に関連づけて捉え直すことができる。（思考・判断・表現）
	第５時	〈アフリカ州に進出している日本企業をＳＤＧｓの視点で見てみよう〉 実際にアフリカ州に進出している企業の取り組みをＳＤＧｓの視点から評価することで、アフリカ州では、日本企業がどの分野での活躍が期待されているか理解することができる。（知識・技能）
第三次	第６時	〈人々が幸せになれるアフリカビジネスを企画しよう〉 ＳＤＧｓの視点と照らし合わせながらアフリカで求められる事業を考えることで、これからのアフリカ州との関わり方について構想することができる。 （思考・判断・表現）
	第７時 （本時）	〈人々が幸せになれるアフリカビジネスを企画しよう〉 ＳＤＧｓの視点と照らし合わせながらアフリカで求められる事業を練り合うことで、これからのアフリカ州との関わり方について多面的・多角的に構想し、議論することができる。（思考・判断・表現）
	第８時	〈他の小集団が企画したアフリカビジネスをＳＤＧｓの視点で見てみよう〉 アフリカ州のよりよい発展を見守りながら、互いに利益を生み出す国際社会の仲間として、どのように関わっていくことが望ましいのか、多面的・多角的に構想し、議論することができる。（思考・判断・表現）

要な役割を果たす。

しかし、地域的特色を踏まえ、知識や概念を活用して現実味のある構想や提案をし、思考力・判断力・表現力を高めるためには、地域的特色を大観できていること、根拠となる知識や概念を多面的・多角的に獲得できていることなどが必須となる。また、主体的に考察し、知識や概念を定着させるためには、生徒の思いを揺さぶる切実な問いが生まれなければいけない。そこで今回の授業実践では、問題分析から意思決定までのプロセスに意識的に取り組んだ。

（4）ＳＤＧｓとの関わり

人々を幸せにできる事業の視点として、ＳＤＧｓを提示した。国際社会がまさに直面している地球規模の課題について示したものであるとともに、生徒が社会を担う 2030 年の社会を想定したものであるからである。ＳＤＧｓの視点から考察・構想することによって、主体的に社会に参加する意欲と、社会科と社会とのつながりのイメージが高まると考えたからである。企画する事業のねらいを明確にするために 17 のターゲットと具体的に関連づけながらも、第二次では、ＳＤＧｓの柱である「持続可能性」と、主要素である「経済発展」「社会的包摂」「環境保全」の４つの視点に大分して考察を行った。具体化しすぎないことで、考察したことや構想したことを、よりＳＤＧｓに結びつけやすいと考えたためである。

（5）ゲストティーチャー

第三次では、ゲストティーチャーとして JICA 職員に来校してもらい、生徒が企画する事業にアドバイスをしてもらった。生徒は第一次、第二次において、図書資料や情報機器を用いて考察、構想するが、それらは編集、収縮された資料である。実際にアフリカでの生活を経験した JICA 職員から、アフリカの多様な側面について知識を広げたりつなげたりしながら、自分たちが企画した事業を振り返ったり、修正したりすることで、より多面的な構想をすることができると考えたからである。

また、ゲストティーチャーにより価値づけされることで、学びを教室の中だけで完結させず、外の社会へと広げていくことで、主体的に社会に参加しようという意欲を高めるという狙いがあった。

３．生徒アンケートの考察より

単元の前後に、以下の生徒アンケートを実施した。ここでは、アンケートの結果から見える生徒の変容について考察したい。

１．アフリカについて知っていること（自由記述）

（1）アフリカ州の自然について知っていること

（2）アフリカ州の産業について知っていること

（3）アフリカ州の生活・文化について知っていること

（4）アフリカ州の歴史について知っていること

（5）アフリカ州の地域的特色は何か

（6）日本はアフリカ州の国々と今後どのように関わっていくべきか

２．今までの社会の授業を通して、自分にどのような力がついていると思うか

３．アフリカ州から思い浮かぶキーワードによるウェビングマップ

はじめに、本単元の目標に大きく関わる（6）の質問について、学習前後では図１のような結果になった。

【事前アンケートの結果】
支援をする (14) ／ 互いの文化の違いを尊重し合う (7) ／ 互いにないものを交流して助け合う (6) ／ 寄付をする (3) ／ スポーツを通して親交を深める (2) ／ 石油の需要の低下を克服する (1) ／ あまり関わる必要はない (1)

【事後アンケートの結果】
互いに利益が出るように、長所と短所をそれぞれ補い合っていく (12) ／ 対等な貿易をする (9) ／ アフリカ州を支援しつつ、お互いに利益を生み出していく (7) ／ 全て助けるのではなく、少しずつ自立に向けていく (6) ／ 互いをよく知る (5) ／ 経済発展を助ける (3) ／ 募金をする（1）／ アフリカ州の可能性に目を受ける (1) ／ 植民地だった時代のことや、経済成長が遅れていることを受け止める (1)

図１　アンケートの変容

大まかに分類し、編集したものではあるが、アフリカ州の国々を、国際社会の中で日本と違うカテゴリーに属する異質なものとみなし、一方的に支援の対象とする見方から、国際社会の仲間であり、互いに協力し合う関係を築くべきであると視野を広げていることがうかがえる。また、豊富な資源や人口など、日本にはないアフリカ州の持ち味に着目した記述もあった。「自立に向けて支援をする」「強力な関係を結べるように経済発展を支援する」など、支援の在り方についても、多面的・多角的に構想している。「双方に利益がなければ、継続して関係を結んでいくことは難しい」という記述もあった。これは、事前アンケートにはほとんど見られなかったこ

とである。また、生徒Aは学習の前後で、図２のような顕著な変容が見られた。

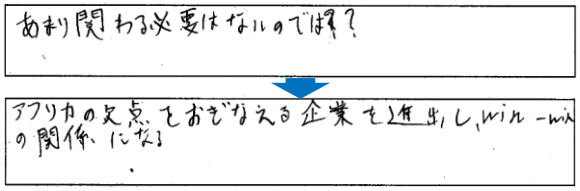

図２　生徒Aのアンケートの変容

以上から、単元の学習を通して、国際協力の在り方について、より深く考察し、構想することができたのではないかと考える。

図３は、学習の前後で生徒が描いたウェビングマップである。

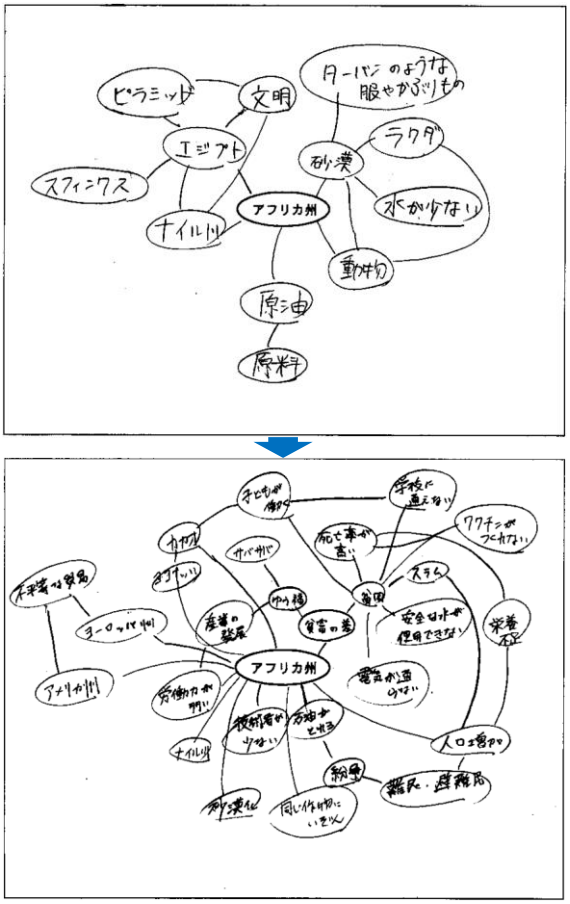

図３ウェビングマップの変容

学習前の用語では、エジプトやピラミッド、スフィンクスなど、歴史で学習した古代文明に関する用語や、ナイル川や砂漠など、地形に関する用語が多く見られた。しかし、現代のアフリカ州で生活する人々に関する用語はほとんど見られなかった。

学習後のウェビングマップでは、基本的な語彙が増えたばかりでなく、産業の特色や経済格差、人口増加や他地域との結び付きなどへの言及が多く見られた。具体的な人々の生活や産業の特色に目を向け、多面的・多角的にアフリカ州の特色を捉えることができるようになったからであると言える。

また、アンケート全体を通して大きな記述の変化に、「子ども」という言葉が使われる頻度もある。第一次に、課題をつかむ手立てとしてカカオ農場で働く子どもの生活について紹介した。生活経験が少ない生徒にとって、最も比較しやすく、印象に残りやすい対象なのであろう。地理的背景や歴史的背景を比較する際、活用していきたい。

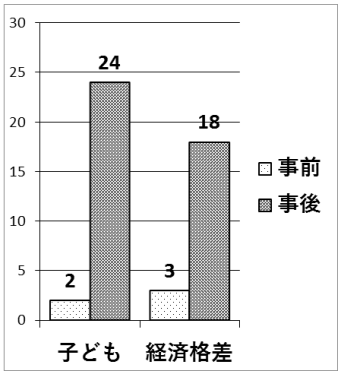

図４　アンケートの記述頻度の変容

４．成果と課題

（１）パフォーマンス課題について

「アフリカ州」「人々」というくくりが大きすぎて、具体的な地理的事象や人々の生活が遠ざかってしまった。例えば、アフリカ州のどのような地域を想定するのか、砂漠気候の地域なのか、熱帯雨林気候の地域なのか、鉱産資源の採掘が盛んな地域なのか、プランテーション農業が盛んな地域なのか、具体的な地域が想定できれば、地域の特色についてさらに掘り下げながら議論ができたのではと考える。同様に、幸せにする対象が富裕層の人々なのか、中間層の人々なのか、最下層の人々なのかについても、焦点化しきれないままになってしまった。

グループによっては、自分たちで地図帳を開き、地域を想定して事業を企画していたが、全体的には生徒の力だけでそこまで行きつくのは難しかった。そのため、具体的な生活の様子や地域の特色まで言及できず、のっぺりしたアフリカ州の白地図の上で、漠然としたアフリカ州の人々についての議論になってしまった。生徒のアンケートの結果より、アフリカの多様な気候や多様な人々にまで認識が及んでいたことを考えると、支援や言葉かけにより、もう一歩踏み込んだ議論になっていたのではないかと思う。

また、実際の企業では、アフリカに進出することを目的に

ビジネスを構想するのではなく、ビジネスの拡大の手段としてアフリカへの進出を考える。だから、今回のパフォーマンスも前提が逆だったのかもしれない。

（2）ＳＤＧｓについて

「ＳＤＧｓ」「アフリカ州の幸せと企業の利益」「持続可能性・経済発展・社会的包摂・環境保全」と、単元を進めていく中で生徒が留意する視点が膨れ上がってしまった。視点が多いというよりも、重層化してしまった。社会的事象は実際に多面的・多角的であるが、教材としてモデル化する上で、考察・構想しやすいように、発達段階に合わせてシンプルにすることも必要であった。

（3）単元の三段階構成について

第二次では、社会的な見方・考え方を働かせながら個々の授業で目標とする知識や概念を身につけ、第三次の事業を企画する活動でそれらを関連づけながら構想することで、集約させることができた。第１時や第５時では、多面的・多角的な考察を促すために、多岐に渡る資料を提示した。

しかし、特に第１時では、中学一年生という発達段階を踏まえると、限られた時間の中で資料を分析したり、自分の主張の根拠となる資料を選択したりすることは難易度が高かった。小集団での意見交換や全体での共有で改めて資料が示すものに気づいたり、論拠となる資料を追加したりする姿は見られたものの、もっと焦点を絞って資料を提示する必要もあったように思う。

第５時では、実際にアフリカ州に進出している事業を事例として提示した。これも文章量としては少なくなく、読解に苦労する生徒はいたものの、企画する事業のモデルとしてとても効果的であった。

（4）ポートフォリオについて

一時間の学びを振り返り、かけ流しにせずに蓄積させる上で有効であった。授業の中でも、適宜ポートフォリオを読み返し、関連する資料をめくりながら自分の考えを再構築する姿が見られた。生徒が見通しをもって学習に取り組み、単元の目標に向かっていく上でも効果的であったと考える。また、授業者が形成的評価を行う上でも有効であった。一方で、振り返る対象が明確でなく、まとめになってしまったり、感想になってしまったりする生徒も見られた。何に注目することで何に気づいたのか、どのように考えることで何が分かったのか、振り返りの方向性をきちんと明確にすることで、コンピテンシーをベースにした授業にさらに近づけていけるのではないかと考える。

５．まとめ

今回の実践を通して、課題をつかみ、考察したことを踏まえて構想することで、アフリカ州の地域的特色を多面的・多角的に捉えることができたと考える。しかし、地域的特色を具体的に表現できるパフォーマンス課題の提示や、獲得したコンピテンシーをどう評価につなげるかなど、さらに改善が必要であると考える。また、多くの生徒は、課題を解決する力や、様々な立場から見たり考えたりする力が身についていることを実感している一方で、それらが社会に参加するために必要な力に結びついているという実感は希薄であることがうかがえる。授業を通して育てた能力が社会参加につながっていくというイメージを、生徒自身につけさせる手立ても充実させていきたい。

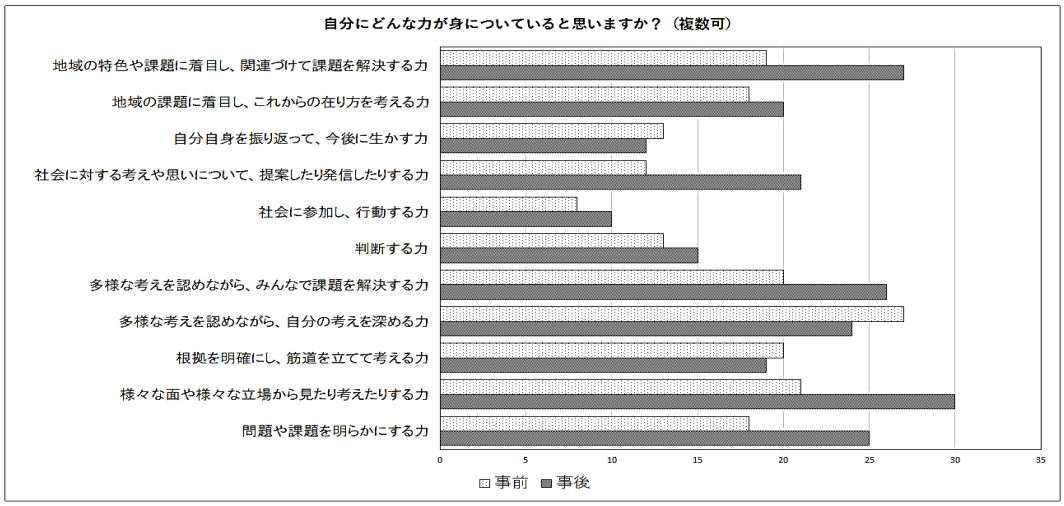

図５　授業で身についていると思う力